

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：33906

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K02373

研究課題名(和文) 未来志向型コンピテンシーを育てる特別活動：話し合い活動を中心に

研究課題名(英文) Extra-Curricular Activities fostering key competencies for the future: with a focus on discussion activities

研究代表者

山田 真紀 (YAMADA, MAKI)

椋山女学園大学・教育学部・教授

研究者番号：30329643

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：日本の学級活動「話し合い活動」は、未来志向型コンピテンシーである「問題解決力」と「“折り合いをつけながら合意形成”することで異なるものとの共生力」を高める活動であることを、参与観察によるデータ収集と、授業分析の手法を用いて明らかにした。さらに、外国人研究者による日本の学校教育のエスノグラフィを用いて、「日本の特別活動がこれまでどのように紹介されてきたか」を分析した。その結果、特別活動の機能として「非認知的な能力を育てることで、認知的な能力の形成に効果的に寄与している」「向学校的な価値観と態度を育てることで秩序維持に寄与している」の2つが描かれていることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

第一に「日本の教育モデルの海外輸出」との関連で、高まりつつある海外からの特別活動への関心に対し、未来志向型コンピテンシーとの関わりのなかでその効果を科学的に示しつつ、世界の学校教育に役立つモデルを示すことができるという意味、第二に「国内の実践の改善と充実」との関連で、必ずしも理想的に展開されているわけではない現状の日本の実践を「授業研究 Lesson Study」の手法を用いて改善・充実させていくという意味、そして第三に「特別活動の学術的研究の蓄積」との関連で、逐語記録を用いた授業分析の手法を特別活動に適用することで、特別活動の効果と意味を科学的に明らかにする方法を確立するという意味である。

研究成果の概要(英文)：Using data collection through participant observation and lesson study analysis methods, we found that Japanese classroom "discussion" are activities to enhance the future-oriented competencies of "problem-solving skills" and "the ability to coexist with those who are different through consensus building". Using ethnography of Japanese school education by foreign researchers, we analyzed "how Japanese extra-curricular activities(TOKKATSU) have been introduced in the past. The results revealed that two functions of TOKKATSU were depicted: "by fostering non-cognitive skills, they effectively contribute to the formation of cognitive skills" and "by fostering school-oriented values and attitudes, they contribute to the maintenance of order".

研究分野：比較教育学 教育社会学

キーワード：特別活動 話し合い活動 TOKKATSU 授業研究 日本型教育モデル

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

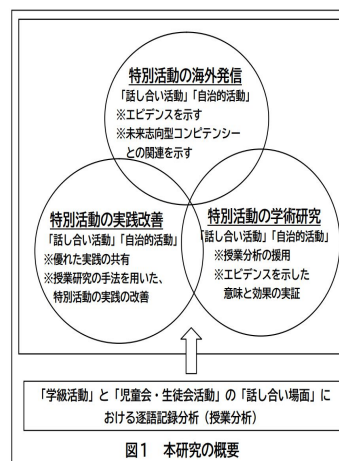
### 1. 研究開始当初の背景

本研究の学術的背景は、以下の3点である。近年、諸外国からの特別活動への関心が高まっているものの、紹介すべき活動のコンテンツが十分に準備できていない現状があること、特別活動のうち、特に「学級活動」と「児童会・生徒会活動」は近未来の市民に不可欠とされる「問題解決力」と“折り合いをつけながら合意形成”することで異なるものとの共生力を高める活動であるものの、国内では必ずしも理想的に展開されているわけではなく、改善が求められること、特別活動の学術研究において、特別活動の意味や機能について科学的根拠を示した分析が求められているものの、特別活動は、「45～50分間で教室にて完結する教科の授業」に比べて、時間的にも空間的にも広がりを持つことから研究しづらいという、目的が社会性や人間性の育成というように抽象的で効果測定が難しいことから、特別活動の効果と意味を科学的に明らかにする方法が未だ確立されていないこと、である。

### 2. 研究の目的

本研究は、以上の問題意識に基づき、日本の学級活動と児童会・生徒会活動を対象とし、これらが近未来の市民に不可欠とされる資質能力(以下、未来志向型コンピテンシー)である「問題解決力」と“折り合いをつけながら合意形成”することで異なるものとの共生力を高める活動であることを、参与観察法を用いて明らかにすることを目的とする。

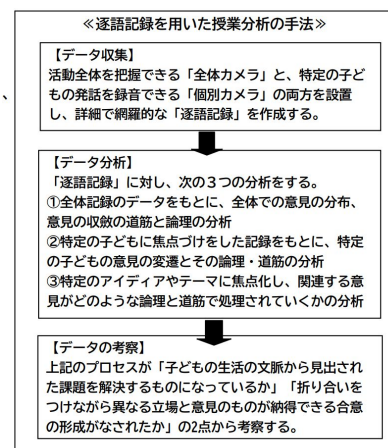
この研究は3つの社会的意味を持つ。第一に「日本の教育モデルの海外輸出」との関連で、近年、高まりつつある海外からの特別活動への関心に対し、未来志向型コンピテンシーとの関わりの中でその効果を科学的に示しつつ、世界の学校教育に役立つモデルを示すことができるという意味、第二に、「国内の実践の改善と充実」との関連で、必ずしも理想的に展開されているわけではない現状の日本の実践を「授業研究 Lesson Study」の手法を用いて改善・充実させていくという意味、そして第三に、「特別活動の学術的研究の蓄積」との関連で、逐語記録を用いた授業分析の手法を特別活動に適用することで、特別活動の効果と意味を科学的に明らかにする方法を確立するという意味である。



### 3. 研究の方法

特別活動のうち、特に「学級活動」と「児童会・生徒会活動」の話し合い活動に、逐語記録を用いた授業分析の方法を援用することで、これらの活動の人間形成上・学校の活性化上の効果を科学的に明らかにできるのではないか、という着眼点に基づき、“「学級活動」と「児童会・生徒会活動」の話し合い活動は「問題解決力」と“折り合いをつけながら合意形成”することで異なるものとの共生力を高める効果をもつ”という仮説を検証する。主に用いる方法は、参与観察法とインタビュー調査法であり、収集したデータを「逐語訳の作成 構造分析」という授業分析の手法を用いて分析・解釈する。

また、サブテーマである、「特別活動 TOKKATSU を海外にアピールする方法と内容について明らかにする」「未来志向型コンピテンシーと特別活動との関連の構造を明らかにする」「学習指導要領における特別活動の位置づけや特別活動に含まれる諸活動の再構造化を図る研究」については、文献研究・インタビュー・フィールドワークの手法を用いた。



### 4. 研究成果

(1)メインテーマ「話し合い活動に、逐語記録を用いた授業分析の方法を援用することで、これらの活動の人間形成上・学校の活性化上の効果を科学的に明らかにする」という課題については、以下の2つの研究成果を得ることができた。

学級活動「話し合い活動」に逐語訳を用いた授業分析の手法を適用し、日本の特別活動が大切にしている論理を明らかにすることができた。合意形成のプロセスとして、子ども達は「少数派の意見を大切にする」「全員が納得できる解決方法を模索する」という2つの原則を同時に満たすため、複数の意見を組み合わせる論理として「献立型」「ミニ丼型」「カツカレー型」を駆使すること、そして少数派の意見が十分に尊重されたあとには、仮に意見が却下されることになっても提案者は「納得」のうえで自分にとってのセカンドベストの選択肢に移っていけるというプロセスを示すことができた。子ども達の駆使する「折り合い」「すりあわせ」は、説得力を競い合

うディベートや安易な多数決にはない優れたプロセスである。なぜなら、自分の提案の正当性を主張し、相手の提案のネガティブな側面を攻撃することも少なくないディベートや、多数派が力を持ち、少数派の意見が通りにくい安易な多数決においては、提案が却下された人々の納得を得ることは難しいからである。この成果は1つの学会発表(清水2019)と、2本の研究論文として公表された。(山田・清水2019a、山田・清水2019b)。

表1 意思決定の方法の違い：日本的「合意形成」と欧米的「ディベート」の比較

	合意形成	ディベートと多数決
意思決定のプロセス	参加者が案とその案を提案する理由を述べる。複数の案のなかから折り合いをつけつつ、みなが納得できる新たな案を創造する。	参加者が案とその案を提案する理由を述べる。自分の案と相手の案のメリットとデメリットを指摘しあい、論争する。
最終決定の方法	みなが納得できる案が提示できたとき。(⇒提示できずに決まらないこともある)。	多数決。指示者の多い案が採用される。(⇒多数決をとれば必ず決まる)。
意思決定の根拠	その活動をする意味や集団の目標と合致しているか。	提案者による論理や説得はどちらが優れているか。
構成員の満足	全員からある程度の納得が得られている。	論争に負けた方は(意思決定に従う必要がある)納得は得られていないことも多い。
実社会メタファ	各国の立場や利害を考慮しつつ、合意できる妥協点を見いだすべく話し合う。各国が少しずつ譲歩し(=折り合いをつけ)大国も小国も納得ができる結論を見いだす努力をする。	大国が自らの論理と正義により、異なった意見をもつ国を制圧する。or 譲歩は「弱腰」「負け」と考え、折り合いをつけて解決策を創造できない。

学級活動「話し合い活動」のビデオを、特活に熱心に取り組んでいる先生と特活については特に関心を持たない先生に視聴してもらい、着眼点や感想の違いをプロトコル分析という手法を用いて分析した。その結果、熟達者は、単に自分自身の経験から理由付けをするだけでなく、この話し合い特有の文脈を踏まえたうえで、望ましい在り方を推論できており、児童の話し合いが「問題と感ずる状況」にきた際に、児童の視点を変える目的をもって言い換えを行っている点が初心者と異なるという特徴を捉えることができた。プロトコル分析を用いることで、初心者と熟達者の違いは、「現在進行形の状況に対して、瞬時に原因や展開を推論し、即興的で創造的に最善策を提示できるところにある」ことを実証的に示すことができた。この成果を研究論文の形にまとめ、椋山女学園大学教育学部紀要に投稿した。採択され、1つの学会発表(天野他2019)と2本の研究論文となった(天野・山田2020、天野2021)。

(2) サブテーマ「特別活動 TOKKATSU を海外にアピールする方法と内容について明らかにする」という課題については、日本の特活がこれまでどのように紹介されてきたかを把握するため、既存の英語論文をレビューするという研究と、TOKKATSU の海外展開についての現状を把握し、諸外国との対話を目指すという研究と、海外の視点から改めて日本の特別活動の良さを再確認する研究の3つを行った。

「日本の特活がこれまでどのように紹介されてきたかを把握するため、既存の英語論文をレビューする」という研究については、「日本の学校教育を研究対象とする外国人研究者は特別活動をどう描いてきたか」という視点から研究を進めた。外国人研究者による日本の学校教育のエスノグラフィは、特別活動を主なターゲットとしていなくとも、多くのページを特別活動の意味と機能に費やしていること、特別活動は集団との望ましい関わり方を教える活動であり、「集団の構成員との人間関係の構築」と「集団の価値の内面化」の2つのプロセスを含むこと(山田2021a)、内発的動機付け・リーダーシップと役割活動・班活動・振り返りという4つのメカニズムを持つことが固有の特色であることを明らかにすることができた(京免徹雄2020)。この成果を研究論文の形にまとめ、日本特別活動学会の紀要と椋山女学園大学教育学部紀要に投稿し、採択され、2本の研究論文となった。

さらに文献を増やして分析した結果、特別活動の機能としては、「非認知的な能力を育てることで、認知的な能力(すなわち学力)形成に効果的に寄与している」「向学校的な価値観と態度を育てることで秩序維持に寄与している」の2つがあると描写されていることが明らかとなった。この成果は学会年次大会で公表することができた(山田2022a)。

「TOKKATSU の海外展開についての現状を把握し、諸外国との対話を目指すという研究」については、これまでの特別活動の海外展開には2つの類型があると整理することができた。エジプトのように大統領のリーダーシップのもとで推進される「トップダウン型」と、東南アジアやモンゴルのように特別活動に関心のある教師や学校が日本の教師や大学と草の根的に交流するなかで特別活動を取り入れていく「草の根交流型」の2つである。現在までに、どの国でどのような特別活動が導入されており、現地化の過程でどのような変容があったかについて整理することができた。この分析の成果は、学会で発表したほか(山田2022b)、椋山女学園大学の紀要に投稿し、採択された(山田2023)。さらに、東京大学の恒吉僚子教授の協力を仰ぎ、恒吉僚子教授が運営する「国際教師力研究会 TOKKATSU プロジェクト」のHPに、「たてわり活動(異年齢活動) Mix Aged Activities」「係活動 Class Engagement Activity」のふたつの特活の教材(英文)を掲載した。

「海外の視点から改めて日本の特別活動の良さを再確認する研究」については、キャサリン・ルイス氏の本 *Educating Hearts and Minds: Reflections on Japanese Preschool and Elementary Education* を翻訳することで進めた。ルイス氏の論点を把握するとともに、2019年

3月にルイス氏を日本に招き、30年前に調査を実施した学校に再度訪問し、ともに参与観察を行った。そのデータをもとに、30年間の時を経て、日本の教育の何が不変で何が変わったか、変わったのはどのような社会的変化によるものかを分析するとともに、描かれている日本の教育の特色と特活との関連について分析した。翻訳作業は現在も進行中である。

(3) サブテーマ「未来志向型コンピテンシーと特別活動との関連の構造を明らかにする」という課題については、未来志向型コンピテンシーとして、アメリカを中心とした国際団体 ATC21s の提唱する 21 世紀型スキル、OECD の下部組織 DeSeCo が提言したキー・コンピテンシーと Education2030 の枠組みで示された Wellbeing や Agency、認知能力と非認知能力、社会情動的スキル等の概念の理解に努めるとともに、これらの未来志向型コンピテンシーと特別活動との関係性について考察した。そしてこの考察を行ううえで次の 2 つの視点が必要であることを確認した。「教科が認知的能力を、特別活動や道徳が非認知的能力を担当する」という二分法、あるいは「非認知的能力を育成するプロジェクトとしての特別活動」という外部から導入される散発的な活動というとはではなく、特別活動は子ども達の学校生活の文脈から脱連結されることなく、網の目のように機能する活動であること、特別活動にはさまざまな活動が含まれるため、「特別活動は〇〇の機能を果たす」のように特別活動を一枚岩として語るのではなく、ひとつひとつの活動がどのような方法論でどのような資質・能力を育てるのかを丁寧に見ていく必要があることである。研究成果は 1 つの学会発表（山田 2019）と、1 本の論文に結実した（山田 2021b）。

(4) サブテーマ「学習指導要領における特別活動の位置づけや特別活動に含まれる諸活動の再構造化を図る研究」については、2022 年 2 月と 2023 年 1 月の日本特別活動学会「特活カフェ」で報告し、我々が作成した「青写真」をたたき台として学会員のなかで議論を深めることができた。

## 5. 研究成果の社会への還元

研究期間を通して 24 回の研究会の開催（会場は主に椋山女学園大学、令和 2 年度はオンライン開催）と 8 回の学校見学会の実施（八王子市立式部方小学校・浅川小学校等）3 回の公開研究会の企画・運営と、1 回の国際学会でのシンポジウム・ワークショップの企画・運営を行い、研究成果の社会への還元を努めた。

(1) 2017 年 8 月 26 日・27 日に日本特別活動学会第 26 回大会「グローバルスタンダードな特別活動の創造 TOKKATSU の国内外発信」を企画・運営し、キャサリン・ルイスを招聘するとともに、TOKKATSU の海外発信のキーパーソンによるシンポジウムを開催した。

(2) 2019 年 6 月 22 日（土）に日本特別活動学会の第一回研究会を企画・運営し、研究の進捗状況を報告し、これまでの研究成果を社会に還元することができた。研究会テーマは「特別活動に関する望ましい教員養成と現職教育の在り方を探る」であり、2 つのワークショップ「特別活動の指導法」の模擬授業（授業者：長沼豊氏）、「特別活動」の現職教育の模擬指導（指導者：清水克博氏）秋山麗子氏・清水克博氏・長沼豊氏・村瀬悟氏を登壇者とするパネルディスカッション（司会：添田晴雄氏）を行った。

(3) 2022 年 9 月にマレーシアで開催された WALS（世界授業研究学会）国際大会で、ワークショップを企画するとともに、係活動や当番活動に関するワークショップを実施した。

(4) 2023 年 5 月 21 日（日）に国分寺市立第四小学校において、「TOKKATSU の海外展開を特別活動の発展につなげるために～今、私たちに何ができるか～」という公開研究会を企画・運営し、午前中には特別企画としてエジプトの視察団とともに「お互いを身近に感じて仲よくなるう」をテーマとする模擬学級会を行い、そこで決まったことを実際にやってみる「学級会ハーフ＆ハーフ」を実践する機会を持った。午後のシンポジウムでは、第一部で「レッスンスターディ国際大会 2022」の成果報告を行い、第二部で「TOKKATSU の海外展開の現状とニーズ」について報告し、これらを踏まえて、第三部では「特別活動の海外展開にどのように貢献すべきか」について討議した。

## 引用文献一覧

天野幸輔・山田真紀（2020）「学級活動“話し合い活動”の動画視聴を通じた教師の気づきについての研究 - “話し合い活動”熟達者と初心者と比較するプロトコル分析の試み - 」椋山女学園大学教育学部紀要、13 号、59-71 頁。

天野幸輔（2021）遠隔授業における学級活動「話し合い活動」の指導力育成のあり方に関する基礎研究 - 授業動画視聴と、気づきの分類作業を手がかりに - ，名古屋学院大学教職センター年報，5：59-71。

京免徹雄（2021）「アメリカ人研究者からみた日本の特別活動の特質 日本型教育モデルの発信を視野に入れて」日本特別活動学会紀要、第 29 号、2021 年、41-50 頁。

山田真紀・清水克博（2019a）「小学校における学級活動“話し合い活動”の合意形成プロセスに関する実証的研究 逐語記録を用いた授業分析の手法を援用して」日本特別活動学会紀要、第 27 号、39-48 頁。

山田真紀・清水克博（2019b）小学校における学級活動「話し合い活動」の合意形成プロセスに関する実証的研究（2）：逐語記録とシーケンス構造図を用いた研究手法の開発．椋山女学園大学教育学部紀要，12：127-153．

山田真紀（2021a）「日本の学校教育を海外に紹介する文献において特別活動はどう描かれてきたか」椋山女学園大学研究論集（社会科学編）52号、111-120頁。

山田真紀（2021b）「第9章 特別活動が日本の学校にある意義とは」矢野博之編著『未来の教育を作る教職教養指針9 特別活動』学文社、2021年1月、pp.156-175.

山田真紀（2023）特別活動の海外展開～エジプト・インドネシア・モンゴルでの TOKKATSU の実践を中心に～.椋山女学園大学論集（社会科学編），54：201-221．

#### 学会発表

天野幸輔・山田真紀・矢野正・秋山麗子・清水克博（2019）学級活動“話し合い活動”の動画視聴を通じた教師の気づきについての研究 - 「話し合い活動」熟達者と初心者と比較するプロトコル分析から - . 日本特別活動学会第28回大会，研究発表要旨収録 p.45，2019年9月14日，沖縄市立松川小学校，沖縄．

清水克博（2019）学級活動(1)における話し合い活動が有する合意形成機能の検討 教師の発言影響を分析視点とした授業分析を通して - . 日本特別活動学会第28回大会，研究発表要旨収録 p.38，2019年9月14日，沖縄市立松川小学校，沖縄．

山田真紀（2019）海外との対話から見える特別活動の意義：未来志向型コンピテンシーと特別活動が育てる資質・能力との関係から．日本特別活動学会第28回大会公開シンポジウム「特別活動の国際化・特別活動の海外進出から見える特別活動の意義」シンポジウム登壇者，研究発表要旨収録 p.54，2019年9月15日，沖縄大学，沖縄．

山田真紀(2022a)外国人エスノグラファーの描く特活の機能～秩序維持と学力形成～.日本特別活動学会30周年記念集会(オンライン)2022年1月23日,発表用資料 pp.99-101.

山田真紀(2022b)TOKKATSUの海外展開.日本特別活動学会30周年記念集会(オンライン)2022年1月23日,発表用資料 pp.102-105.

#### 国際発信 HP 原稿執筆 国際教師力研究会 TOKKATSU プロジェクト

<http://www.p.u-tokyo.ac.jp/~tsunelab/tokkatsu/teaching/>

1) たてわり活動(異年齢活動) Mix Aged Activities

2) 係活動 Class Engagement Activity

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計14件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 12件）

1. 著者名 山田真紀	4. 巻 54
2. 論文標題 3) 特別活動の海外展開～エジプト・インドネシア・モンゴルでのTOKKATSUの実践を中心に～	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 椋山女学園大学論集（社会科学編）	6. 最初と最後の頁 201-221
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 京免徹雄	4. 巻 29
2. 論文標題 アメリカ人研究者からみた日本の特別活動の特質 日本型教育モデルの発信を視野に入れて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本特別活動学会紀要	6. 最初と最後の頁 41-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山田真紀	4. 巻 52
2. 論文標題 日本の学校教育を海外に紹介する文献において特別活動はどう描かれてきたか	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 椋山女学園大学論集（社会科学編）	6. 最初と最後の頁 111-120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山田真紀	4. 巻 4
2. 論文標題 地域との相互関係を生かした教育課程の開発	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 新教育ライブラリPremier	6. 最初と最後の頁 94-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山田真紀	4. 巻 29
2. 論文標題 重点課題研究プロジェクト A (未来研) 報告	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本特別活動学会紀要	6. 最初と最後の頁 85-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山田真紀	4. 巻 9
2. 論文標題 第9章 特別活動が日本の学校にある意義とは	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 矢野博之編著『未来の教育を作る教職教養指針9 特別活動』	6. 最初と最後の頁 156-175
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山田真紀	4. 巻 13
2. 論文標題 中学校における学級活動「話し合い活動」の導入に関するアクションリサーチ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 椋山女学園大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 73-85
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山田真紀	4. 巻 13
2. 論文標題 中学校における学級活動「話し合い活動」の導入に関するアクションリサーチ その2 授業分析と質問紙調査の基礎データ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 椋山女学園大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 343-368
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山田真紀	4. 巻 51
2. 論文標題 教職課程における学級活動（話し合い活動）の望ましい指導方法に関する実証的研究 - 映像教材視聴と解説の組み合わせ方に関するアクションリサーチから -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 椋山女学園大学論集（社会科学編）	6. 最初と最後の頁 131-141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 天野幸輔・山田真紀	4. 巻 13
2. 論文標題 学級活動「話し合い活動」の動画視聴を通じた教師の気づきについての研究 - 「話し合い活動」熟達者と初心者と比較するプロトコル分析の試み -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 椋山女学園大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 131-141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 村瀬悟	4. 巻 13
2. 論文標題 生徒会活動による実行委員会を中心とした中学校の学校行事の取組についての実践報告	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 椋山女学園大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 331-342
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山田真紀・清水克博	4. 巻 27
2. 論文標題 小学校における学級活動“話し合い活動”の合意形成プロセスに関する実証的研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本特別活動学会紀要	6. 最初と最後の頁 39-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -



1. 著者名 山田真紀・清水克博	4. 巻 12
2. 論文標題 小学校における学級活動“話し合い活動”の合意形成プロセスに関する実証的研究(2)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 椋山女学園大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 127-153
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 京免徹雄	4. 巻 27
2. 論文標題 国際的視野からみた中学校「学級活動」の特色 - フランスの「学級生活の時間」との比較を通して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本特別活動学会紀要	6. 最初と最後の頁 29-38
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件(うち招待講演 6件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 京免徹雄
2. 発表標題 特別活動がつくる学校の未来 - 開かれた研究と実践に向けて -
3. 学会等名 日本特別活動学会30周年記念集会(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 京免徹雄・山田真紀
2. 発表標題 海外の研究者・実践者からみた日本の特別活動の特質
3. 学会等名 日本特別活動学会30周年記念集会(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山田真紀
2. 発表標題 特別活動の海外展開
3. 学会等名 日本特別活動学会30周年記念集会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 林尚示・天野幸輔
2. 発表標題 コンピテンシー・エージェンシーの育成という国際的潮流からみた特別活動
3. 学会等名 日本特別活動学会30周年記念集会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山田真紀
2. 発表標題 海外との対話から見えてくる特別活動の意義：未来志向型コンピテンシーと特別活動が育てる資質・能力との関係から
3. 学会等名 日本特別活動学会第28回大会公開シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山田真紀
2. 発表標題 中学校における学級活動「話し合い活動」の導入に関するアクションリサーチ
3. 学会等名 日本特別活動学会第28回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 村瀬悟
2. 発表標題 中学校における異年齢交流活動の実践と効果
3. 学会等名 日本特別活動学会第28回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小原淳一
2. 発表標題 中学校教師の生徒会活動に関する指導感の変容について - あいさつ運動の事例検討を通じた一考察
3. 学会等名 日本特別活動学会第28回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 清水克博
2. 発表標題 学級活動(1)における話し合い活動が有する合意形成機能の検討 教師の発言影響を分析視点とした授業分析を通して -
3. 学会等名 日本特別活動学会第28回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 天野幸輔・山田真紀・矢野正・秋山麗子・清水克博
2. 発表標題 学級活動“話し合い活動”の動画視聴を通じた教師の気づきについての研究 - 「話し合い活動」熟達者と初心者と比較するプロトコル分析から -
3. 学会等名 日本特別活動学会第28回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 京免徹雄
2. 発表標題 海外から見た日本の特別活動特質とその変容に関する一考察 - 日本型教育モデル輸出の可能性を視野に入れて -
3. 学会等名 日本特別活動学会第28回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 清水克博・山田真紀
2. 発表標題 小学校における学級活動「話し合い活動」の合意形成機能に関する研究
3. 学会等名 日本特別活動学会第27回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 天野幸輔・山田真紀・ほか
2. 発表標題 学級活動「話し合い活動」の動画視聴を通じた教師の気づきについての研究 - 小学校教師と教職課程履修学生の観点の違いに注目して -
3. 学会等名 日本特別活動学会第27回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山田真紀
2. 発表標題 未来志向型コンピテンシーと特別活動 国際バカロレアと特別活動との比較
3. 学会等名 日本特別活動学会第27回大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

TOKKATSUの教材1：たてわり活動（異年齢活動）Mix Aged Activities  
<http://www.p.u-tokyo.ac.jp/~tsunelab/tokkatsu/teaching/>  
TOKKATSUの教材2：係活動 Class Engagement Activity  
<http://www.p.u-tokyo.ac.jp/~tsunelab/tokkatsu/teaching/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	林 尚示  (HAYASHI MASAMI)  (10322124)	東京学芸大学・教育学部・教授   (12604)	
研究分担者	添田 晴雄  (SOEDA HARUO)  (30244627)	大阪市立大学・大学院文学研究科・教授   (24402)	
研究分担者	京免 徹雄  (KYOMEN TETSUO)  (30611925)	愛知教育大学・教育学部・講師   (13902)	
研究分担者	杉田 洋  (SUGITA HIROSHI)  (70390581)	國學院大學・人間開発学部・教授   (32614)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------